

Earthquake disaster

東日本大震災を受けて

東日本大震災により被災された皆様には、心よりお見舞い申し上げます。

身边にある被害の数々

3月11日に発生した東日本大震災は、これまでに体験したことがない揺れと津波、さらには原発事故も重なり、未曾有の大災害となりました。亡くなられた方々のご冥福をお祈りすると共に、被災された皆様が一日も早く心安らかな暮らしが取り戻せることをお祈りしております。

ミレニアムシティの2つの施設がある千葉県旭市と香取市は共に被害を受けました。旭市では、あさひミレニアムシティから4kmほどのところにあり、いつも通る飯岡の町が津波を受け13名の方が亡くなられ、2名がまだ行方不明です。家屋も336戸が全壊しました。多くの方が仮設住宅で暮らしています。香取市でも、江戸の面影を残す佐原が液状化の被害を受け、また田んぼの灌漑設備が損傷して田植えができないなどの被害を受けました。



飯岡のガレキ撤去ボランティア

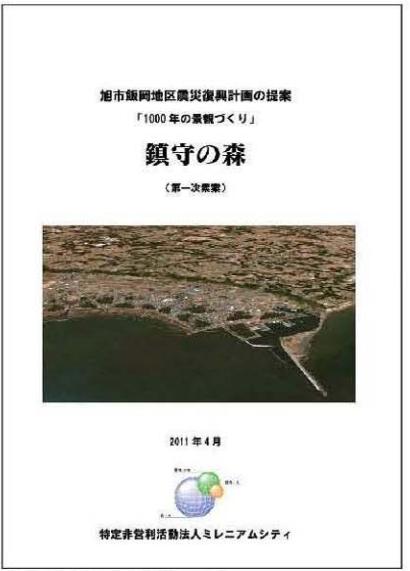


飯岡のガレキ撤去ボランティア

復興にむけての多様な活動

幸いにも、ミレニアムシティの2つの施設では被害がありませんでした。しかし、こういう時だからこそ、何かできることはできないかとの思いから、ミレニアムシティでは次の活動を行いました。

- ①飯岡の被災地のガレキ撤去のボランティア活動
 - ②旭市に対して復興計画提案書提出
 - ③災害義援金の募集と寄付……旭市と香取市に寄付をしました
- その後、岩手県大船渡市からの呼びかけに応えて、いくつかの団体と協働で復興計画づくりのお手伝いをしています。被災地の仮設住宅で暮らしている皆さんにお集まりいただき、これから住まいや生活をどういうふうにしたいかというワークショップを行っています。
- 被災地ではこれから復興に際して、お互いが支え合い、豊かなコミュニティをさらに発展させる住まいづくりや自然に則した生活が求められています。これは震災復興エコビレッジをつくることとも言えます。ミレニアムシティが培ってきたノウハウを活かしていくと考えています。



旭市復興計画提案書



大船渡市で復興計画づくりワークショップ

Proposal

国際救助都市の提案

新しい都市の姿の提案

東日本大震災を経て、日本には大きな転換期が到来したと思います。これまでの価値観は揺さぶられ、まさしくパラダイムシフトが求められています。そのような未来に対して、今、何が構想できるのか。それが問われています。

昨年度、国土交通省の研究会に参加して提案させていただいた長期耐用近隣住区プロジェクトは、場所を千葉県に移して研究が続いている。住宅団地に新たな目的を付加して、ペットタウンだけではない魅力的で環境にも配慮した住宅地をめざしています。おりしも東日本大震災が起き、防災がクローズアップされると共に、転換期に即した住宅地づくりが求められています。ミレニアムシティでは、単に災害に強い街とするのではなく、以前から構想があったモバイルタウンをベースに、災害時に救助活動ができ、原発事故などの際には速やかに家ごと避難できる都市を構想しました。

現在、この構想をもとに住宅団地を活性化する計画案に取り組んでいます。

もともとネットワーク・エコビレッジの考え方とは、定住の責任感と住みかえの自由さをあわせもつ、ゆるやかな都市像、コミュニ

ティ像（ゆるコミ）のあり方のモデルです。海、山、都市、農場、牧場 etc に拠点をもち、それぞれがエネルギーと食糧の半自給自足を前提としているので、そのうちのひとつやふたつの拠点が津波や放射能汚染等で住めなくなつたとしても、容易に他の拠点に避難や移住ができる、しかも同じゆるやかなコミュニティの内側での移住のため、移住によりコミュニティが分断されることもないといった災害にも強いモデルです。

これにさらに、建築や家が移動できるトレーラーハウスやキャンピングカー等の性能をとりいれることで、使用後の仮設住宅がゴミ化するのを避けられたり、緊急的な応急避難拠点もつくれます。放射能汚染などには特に有効でしょう。エコという意味でも、建築が移動可能ということはリ・ユースモデル（再使用可能モデル）という環境負荷の極めて少ないモデルです。

また発展的には、キャンピングカーやトレーラーハウスで災害現場に救助に向かうことも可能になりますし、このような方法でまちをつければ、全体がモバイルタウンとなり、日常的にはエコタウンとして機能し、災害時には、防災拠点としても機能する全く新しい「未来型防災エコタウン」としてのモデルとなる予定です。

